

誌季
能古博物館だより



能古島、出合った野鳥たち

日本野鳥の会福岡支部 能古島鳥類調査班

□はじめに

能古島の野鳥に関する記録は、「能古島の自然 一九八四年」をはじめ六つの文献に記載されています。これらをまとめると、能古島で記録されている野鳥の種類は、外来種三種を含め十六目三十八科百十九種に上ります。今回二〇〇四年十二月と二〇〇五年一月の予備調査を経て、二〇〇五年二月～二〇〇六年一月までに、合わせて二十回の現地調査を実施しました。この結果、今回確認された野鳥は、外来種三種を含め十五目三十九科百十四種で、文献に記載されている種類数とほぼ同様の記録が得られました。

能古島渡船場にて
ツバメの雛
季節変化に着目すると、一月に六十一種と最も多く確認され、次いで二月と三月に五十五種が確認されました。確認種類数が最も少なかったのは七月の二十九種で、冬季から春季にかけて多く、夏季には少ないという傾向が伺えます。

□確認された野鳥たちと 出会えなかった野鳥たち

今回の調査で初めて確認された種類は、カンムリカイツブリ・ヒメウ・ササゴイ・オシドリ・ヒクイナ・コチドリ・トウネンやミユビシギなど四種のシギ類、ツツドリやホトトギス・ヒメアマツバメ・ブツポウソウ・ヤマガシラ・コシアカツバメ、コマドリなど三種のツグミ類、コヨシキリなどウグイス類三種、ユキホオジロ、野生化したアヒルやソウシチョウなど十目十七科二十六種でした。一方、過去に記録されながら、今回の調査では観察できなかった野鳥は、ミミカイツブリ・チュウヒ・コアジサシ・カンムリウミスズメ・カラスバト・ヨタカ・ヒガラ・コイカルなど十一目二十科三十一種にも達しました。これは、能古島を含めた福岡の自然環境の変化に起因するのではないかと考えています。

□季節別にみた野鳥たち

年間を通して毎月確認された野鳥は、クロサギ、アオサギ、ミサゴ、トビ、ウミネコ、キジバト、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、カワラバト(ドバト)の十七種でした。



アオバズク 能古島の森にて

夏鳥はサシバ・アオバズク・ツバメ・ヤブサメ・キビタキなど、冬鳥はカンムリカイツブリ、ヒドリガモやウミアイサなどのカモ類、セグロカモメ・キクイタダキ・ミヤマホオジロ・アオジなどが観察されました。春や秋に観察することができた旅鳥と言われる野鳥はハチクマ、シロチドリ・ハマシギやミユビシギなどのシギ・チドリ類、キマユムシクイなど、漂鳥と言われ小規模な渡りを行うミソサザイやウグイスなどが観察されました。西日本では迷鳥のユキホオジロは、冬に二ヶ月ほど滞在していました。

外来種と言われるアヒルは夏と秋に、カワラバト(ドバト)は年間を通して、最近国内で分布を拡大させているソウシチョウが冬から春に、観察されました。近年、油山でもソ

ウシチョウが増えており、能古島では今回初めて記録されました。この鳥の勢力拡大は気になります。

□環境別にみた野鳥たち

☆陸域

陸域の代表的な環境は、住宅地などの集落、照葉樹などの森林、田畑などの農耕地、上空が挙げられます。一年を通してみると、住宅地などの集落ではキジバト・ツバメ・ジョウビタキ・スズメ・ハシブトガラス・カワラバト(ドバト)など、照葉樹などの森林ではキジバト・コゲラ・ヒヨドリ・シロハラ・ツグミ・ウグイス・キクイタダキ・ヤマガラ・シジュウカラ・メジロなど、田畑などの農耕地ではモズ・ホオジロ類・カワラヒワなどが確認されました。また、上空ではハチクマやハイタカなどのタカ類の渡りが確認されました。

☆水域

水域を代表する環境は、沖合海域や溜池です。沖合海域では、カンムリカイツブリ・ウミアイサ・ヒレアシシギ科の一種などが、溜池ではカイツブリやカモ類などが確認されました。

海岸では、シロチドリ・ハマシギ・ミユビシギなどのシギ・チドリ類、湿地ではタシギなどが、岩礁ではウミウ、クロサギ、セグロ

カモメ・ウミネコなどのカモメ類などが確認されました。海岸の汀線部、水田、小河川及びその周辺の森林などでは、ダイサギ・アオサギなどのサギ類、ミサゴやトビなどの肉食性のタカ類、ヒドリガモなどのカモ類、ハクセキレイなどが確認されました。



ウミネコ 北浦海岸にて

□貴重な野鳥たち

確認した貴重な種と考えられる八目十三科十九種の野鳥のうち、環境省が絶滅の恐れがあるととしてレッドデータブックに掲載している種類の中では、ミサゴ・ハチクマ・オオタカ・ハイタカ・ハヤブサ・ブッポウソウ・サンショウウクイの七種です。また、福岡県レッドデータブックに掲載されている種の中では、カンムリカイツブリ・オシドリ・サシバ・ヒクイナ・アオバズク・コマドリ・キビタキ・オオルリなどの十五種、福岡市の貴重生物種の中では、フクロウ・ヤツガシラなどの十四種であり、多くの貴重な野鳥を確認することができました。



ユキホオジロ 磯辺公園付近

まとめ

今回の能古島鳥類

調査の活動を通して、大きく二つの成

果が得られました。

一つは、過去の記録

を整理することによ

り、今回の記録を含

めて年間を通した鳥

類相の把握ができた

ことです。もう一つは、貴重な野鳥を確認できたため多くの人達が野鳥を通して能古島に注目したことです。

調査の結果から、本島では多くの野鳥を確認することが出来ました。しかし、海で隔てられた島という環境であるため、開発などにより自然が改変されるとその影響は大きく、比較的簡単に生息種が減少してしまう可能性があります。

最後に、調査は日

本野鳥の会福岡支部会員の有志で、のべ七十九名の協力により実施しました。この場を借りて協力頂いた会員に感謝すると共に、このような機会を与えて頂いた関係者の皆様にも感



調査風景 遊歩道にて

謝致します。

参考

鳥の生活

鳥は空を飛び、地面を走り、水にもぐるなどそれぞれに得意技を持って生きています。また、季節を選んでこの地球上をダイナミックに「渡り」という移動を繰り返しています。日本で繁殖する為、春に南方から渡ってくるものを「夏鳥」、日本より北方で繁殖して秋から春先に日本で冬をすごすものを「冬鳥」、春や秋に観察することができる「旅鳥」、小規模な渡りを行う「漂鳥」などの区別がなされています。

渡り…定期的に繁殖地と越冬地など長距離を往復する移動のこと。

外来種(移入種ともいう)…一般的に国外から人為的に持ち込まれ、野外に逸出し野生化した種。各地で在来種を脅かす可能性がある」と指摘されています。

▼日本野鳥の会福岡支部では、タカの仲間、ハチクマの渡りのピークにあたる九月二十三日(秋分の日)に本島の展望台にて、毎年継続して探鳥会を行っています。皆さん是非参加されませんか。
▼野鳥が好き、自然を守りたい、そんな気持ちが日本野鳥の会をささえています。
「お試し入会」
問合せ先 ☎〇三―五三五八―三五一〇



カワラヒワ



クロサギ



ジョウビタキ(オス)



ヒドリガモ



ホオジロオス(左) メス(右)



ミユビシギとハマシギの群れ



タシギ



ダイサギ(左)とウミネコ(右)



アオサギ



イソヒヨドリ(オス)



イソシギ



ツグミ



コサメビタキ



トビ



ノスリ



ハチクマ



ハイタカ



ハクセキレイ



ハシボソガラス



ハヤブサ



ヒバリ



マガモの群れ



ミサゴ



ヤツガシラ

南冥と鎮西の漢詩人(三)

南冥と雲華上人

神戸女子大学名誉教授

林田愼之助

廃黜後の南冥のもとをしきりに訪れた文人、学者のなかに、雲華上人もいる。

雲華は豊後竹田の出身で、田能村竹田とは竹馬の友であった。雲華の積名は大舎、竹田村の満徳寺の住職末弘円点の子であった。田能村竹田の母のりかは、この満徳寺の末寺憶念寺の出であったので、二人は法外の親友となった。田能村家は貧しいとはいえ、藩医の家であった。

後年、『竹田莊師友画録』で田能村竹田は、〈積大舎〉の一条をもうけて、蘭の絵の名手として、当時にきこえていた雲華上人のことを記して、つぎのように語っている。

積大舎は雲華と号す。我が邑の人なり。豊前州の古城の正行寺に住む。前住の上人は学徳兼備、声名顯著にして一宗の宿老為り。雲華は其の法嗣と為り、学問英邁、勃然として継起し、東本願寺に擢せられて講師に任嗣し、命ぜられて京師に移り、其の法を宣流す。一たび堂に上る毎に、聴徒は幾千を以て計う。然るに人為風流にして瀟洒を作為す。平生茶を

好みて酒を好まず。初め古城に居りて、歳毎に茶を製す。其の採摘焙造に当たるの時、精心に力めること一連数日、眠食俱に廃す。嘗て之を播紳某公に贈る。公は之を喫し、其の引風浮光の態を愛し、之を雲華と名づく。雲華悦びて即ち取りて号と為す。又蘭を愛す。貯うる所数十盆。唐舶の素心蘭を崎鎮に載装すと聞けば、人を差わして舁ぎ到る。途七十里、金を費すこと若干、晨夕對抗し、其の傍に起臥して、栽培灌漑し、四時調停す。悉く、其の法を諳んじ、其の性に通ず。是に於て筆を把り之を描けば、心は蘭と化し、之を筆墨に現せば、凡そ晴の喜び、雨の威い、風の翩り、露の妍しさは、備さに諸を態に尽くし、各其の妙に詣る。間仰臥して作り、側坐して作ること有り。手に随いて塗沫し、一たび揮えば数十紙。之の自然に発し、天真爛漫なり。其年東行し、箱根山中に抵る。風雨連日、関下に信宿す。因つて湖水を研ぎ、蘭を写すこと一卷、携えて東都に到る。一時の名士相伝えて欣賞す。長歌短句の題贈は紙に満ち、略虚白無し。近人清人の陳達の墨蘭譜至る。描法題字、公の筆と絶だ相肖たれば、芸園は伝えて以て奇となせり。其の詩に至つては、予別著有り、此に贅せず。

これは、風流人が風流人を描いているだけに、雲華上人の風流に生きる洒脱な風貌姿勢が見事に活写されている。もともと茶を好み、蘭を愛する楽しみは、中国近世の風流な士君子の資格のうちにあった。「素心蘭」が長崎に舶載されてきたときや、それを取り寄せ、それと起臥を共にし、その生成の呼吸をとらえ、その性をつかんで、ついに雲華の心が「素心蘭」と一体となった結果、自然に蘭を描く名手となったと説く田能村竹田は、雲華上人のなかに風流人の一つの典型を発見していた。



懸崖蘭画

文化二年(一八〇五)、京撰の地を初めて踏んだ田能村竹田は、豊前中津藩の丸岡氏に宛た手紙のなかでも、貴地の雲華上人は芸に遊ぶが、大才力の人物だとほめちぎっている。その三年ほど前に、雲華はその学問と見識をかわれて、京の東本願寺の学頭として迎えられていた。雲華は竹田とは三歳ちがいの兄貴分であったが、風流の道でも竹田に大きな影響をあたえた。二人の交誼は竹田の死まで続いた。この二人の共通の友人が頼山陽である。

は消え去ることがなかったという。

この歳の「南冥甲子稿」にも、雲華上人にあてた漢詩三首がとどめられている。さきほど紹介した田能村竹田が京摂の地から、この歳に中津の丸岡某氏に送った手紙の様子でもわかるように、三年まえ京都から暇をもらって、耶馬溪の正行寺に帰っていた雲華は暫時そこに腰を落着けていた。この歳も竹田の後を追うようにして、雲華上人の南冥詣ではつづいている。こうして南冥への傾倒がふかまるにつれて、三十歳の年のへだたりとは関係なく、二人の交誼もしだいにこまやかさを増していった。「南冥甲子稿」に「大含上人の故山に還る二首」と題して、南冥が雲華に贈った送別詩がある。其の第一首をここにあげてみよう。

能古博物館だより

自君求我後	君の我を求めしより後
錦字積成堆	錦字 積りて堆を成す
刮目僅三日	刮目 僅かに三日にして
驚人實幾回	人を驚かすこと実に幾回ぞ
雄鳴雲表鶴	雄鳴す雲表の鶴
奇艶雪餘梅	奇艶なり雪餘の梅
悵此春臺夕	悵むらくは此の春台の夕
離懷不易裁	離懷の裁ち易すからざることを

脱俗の風味の中に、ひとときわさえた、あてやかな香りで雲華は身をつつんでいた。南冥はそのような上人の人柄に魅せられていた。

「雲表の鶴」「雪餘の梅」という表現の中に、そのことが読みとれる。

しかも南冥は雲華上人と会うたびごとに、その洗練された洒脱な感性と興味に刮目した。年少とはいえ、雲華は南冥にとつて、自分の文学創造を刺激する恰好な友人となっていた。その第二首の漢詩をみると、「春寒くして人疾み易し。海駅に風霜を慎しめ。」と結んで、春浅くして肌寒い季節の旅路が無事であることを祈って、南冥は雲華にこまやかな気配りをみせている。

そのときのことであろう。雲華は筑前黒田藩の領内から出ることを許されぬ南冥に、景勝の地耶馬溪にある正行寺の僧院の境界とその風物の様子をいちいちこまかに語つてきかせ、その寺の二十境の景物を漢詩に詠みこんでもらいたいと頼んでいる。それでできあがったのが、「題を北豊小城山寺の二十境に寄せ、大含上人の需に应ず」と題した二十首の五言絶句である。そのなかの「木屋」一首はこうである。



古城 正行寺眞景

不見木屋花 見ずや木屋の花
清香月中落 清香 月中に落つ

如非玉兔丹 如し玉兔の丹にあらざれば
定是嫦娥藥 定めて是れ嫦娥の藥ならん

玉兔、嫦娥の仙薬の故事を、月の光のなかで妖しく清らかな香りを放つ木屋の花に懸けるところが妙である。もちろん木屋は正行寺の一景物である。雲華は喜んだにちがいない。その後も二人の交誼は親密度をましてつづいた。文化五年（一八〇八）、六十六歳の「南冥戊辰稿」に、「雲華の寄せらるるに謝して和す二首」があり、その翌年の文化六年、六十七歳の「南冥己巳稿」に、「甘木より還りて雲華上人を懐う有り」の一首、「雲華含公の崎鎮に遊ぶを送る」一首をとどめている。南冥が非業の死をとげる四年まえのことであった。崎鎮は長崎、そこへゆく途次に雲華は南冥をおとずれたのである。これが二人の最期の会面であった。 ※次号は「南冥と田能村竹田」です。

耶馬溪 「ふるさと文化遺産郷土資料事典」から
(株)ワークス編集 (株)ゼンリン発行
 雲華上人肖像画 城慶山 正行寺蔵
 古城 正行寺眞景
 「雲華上人遺稿」から
 赤松翠陰著 雲華上人遺稿発行所

筑前亀門烈伝

最終章 「金印怪異伝」

劇団ショーマンシップにより、毎年甘菜館SHOW劇場にて上演されている「筑前亀門烈伝」シリーズが今回で最後となりました。再び亀井南冥が主役です。パンフレットを同封しています。ぜひお出かけ下さい。

